

眠い目を擦りながら、自宅の戸を開ける。昨晚の夜更

かしが響いているのか、布団の中からどうにか手を伸ばして止めた目覚まし時計には、普段よりも三十分ほどの遅れた時間が刻まれていた。とはいえ朝食もそこそこに身支度を整えて最低限の荷物を持てば、大体いつも通りの時間である。通勤通学には早い時間帯だから人通りはまばらな道を、欠伸とともに進んでいった。

商店街とは少し離れた場所にある洋菓子専門店、ここに俺は何年もの間勤めている。誕生日やクリスマス、それ以外の祝い事、平凡な日々を彩る商品が店内を飾り、人々を呼び寄せて常に賑やかな店だ。そこで俺は、売り子ではなくパティシエとして働いていた。

鍵を出して裏口のドアノブを回す。しかし何故か開かない。もう一度鍵を差し直して、裏口からスタッフルームに入った。制服に袖を通す頃には頭は仕事モードに切り替わっていて、眠気は一切なくなっていた。荷物と脱いだ上着をロッカーにしまい込んで厨房に入る。

いや、入ろうとした。

扉を開けた瞬間に視界に入ったのは、清潔さの保たれた銀色に光るシンクと白い壁が汚された空間だった。部屋の全てではなく、奥の一ヶ所のみが本来の色彩を失って濁った赤色に染められていた。足が厨房を拒むと同時に思考も止まる。しかしいくら突っ立っていても、汚れが消える訳ではない。掃除するためにも原因を知るためにも、中に行かなければならない。どうにか足を交互に動かして前に進む。妙な緊迫感と共に向かうと、鉄の臭いが届くようになった。赤色を目で辿って、そっと足元を見る。すると、首から血を溢れさせた友が床に全身を預けて宙を仰いでいた。

時計の針が開店時刻を示す前から、店内には普段以上の騒がしさがあった。しかし、販売スペースに設置されたショーケースの中身は空で、店員は一人も立っていない。厨房で動く人間も、真っ白な制服を身に着けていなかった。今朝の異常な光景によって、俺とその他の従業員は全員がスタッフルーム周辺の廊下に追い払われたのである。正確には俺が呼んだ警察らによってであるが、何にせよ動ける範囲は限られていて、警察が捜査を始めて以降この店の関係者で外に出られたのは、血塗られた友のみだろう。現状を理解しきれない従業員たちはこの異様な現状に、不安の表情を浮かべて黙っていた。

「第一発見者の方はどちらですか」

そんな空気の中、スーツをきつちりと着込んだ青年が販売スペースのある方向から声を上げる。この声を合図にして、一斉に視線が俺に集まった。青年のもとに向かうと、人目の届かない小さな部屋に誘導される。季節ごとに店内の装飾に使われる飾りが雑多に置かれる中、俺と青年、初めからその室内にいた彼の仲間と思しき男性の三人で外の空間と隔離されることになった。

「それでは、発見した時のことを教えてください」

「いつもの時間に仕込みのために厨房に入ろうとしました。俺がいつも最初に来るんです。……そういうのは、裏口のドアが開いてました。それで、あそこが血で汚れていて、近付いたらあの状態で倒れていたんです。驚きましたけど、急いで警察に連絡しました」

体勢を整えると、青年が言葉を発した。実際にこの台詞を聞く人は一体どのくらいいるのだろうか。考えたところで無意味な疑問が、ふと頭に浮かぶ。現実味の薄い環

境に、えも言えぬ感情が頭を占めた。果たして俺は、冷静に答えられているだろうか。

「あなたと被害者との関係は？」

「仕事仲間であり、友人ですよ。専門学校から一緒に、良いライバル関係を築いていました」

彼らの視線は下に向き、恐らく俺が言ったことをノートに書きこんでいる。別に嘘を付いていないのに、ペントが紙を擦る音に少しの恐怖を感じた。

「彼の殺害される理由に心当たりはありますか？」

「さあ。あ、でも彼には、新商品の開発が任ざれていました。もしかしたら彼にその仕事が行ったことを気に入らない人がいたのかもしれませんが」

淡々と彼らからの質問は続いていく。それでも徐々に痛々しい友の姿を憂える余裕が出てきた。新商品の開発は、今後の店の印象にも繋がる重要な仕事だ。それゆえにパティシエとしての技量を試されるもので、そう簡単には託されるものではない。そんな仕事であるからこそこの仕事に対してプライドが高い人が羨ましさを超えて恨めしさを覚えたとしても、変なことではないはずだ。友として彼の姿を見ていた身としては、適切な判断が下された結果だと納得できるが、皆がそうとは限らない。

「確か、キウイを使って試行錯誤していました。完成予定の日も近付いていたので、最近はや遅くまで残っていることも多かったです。全員知っていると思います」

秘密裏な作業ではないから、彼自身から進捗を聞くことも多々あった。開発は順調に進んでいたらしく、今週末には一旦検討会を開こうという話も出ていたようだ。

俺も参加する予定だったが、結局試作品を見ることさえできなかったのが悔やまれる。殺害がこのタイミングで行われたことに、何か意味はあるのか。あれだけの努力

をしていた彼は、襲われた時に何を思ったのだろう。

「なるほど。では最後に、昨夜の十時から一時にかけてあなたは何をしていましたか？」

「その時間は自宅ですよ。ゲームで遊んで、それから寝ました。まあ、残念なことに一人暮らしですから証明はできませんけどね」

死体の発見以降、店は捜査や従業員のメンタルケアといった理由から、暫くの期間を休業することになった。しかし今日は葬式があり、久しぶりに仕事仲間が一ヶ所に集まる日となっている。葬式の会場では、俺の遺族と仕事仲間たちが何脚にも並べられた椅子に座っていた。そして式場のスタッフや、やって来る人々が黒い衣装を纏っている中、俺はただ真っ白な死に装束を身に付けさせられ、棺桶で眠っていた。

こんな様子を、俺は正面から眺めている。絶大な痛みを乗り越えた結果、まさかの幽霊としてこの世界に取り残されてしまったのだ。仕事を終わらせられなかったことに、何か未練でもあるのだろうか。

それに関して心当たりはなかった。そもそも幽霊を信じていなかった俺自身にとつて、この数日間は戸惑いしか感じなかったのだ。首には違和感が残っていたし、店内でも自宅でも何もできずに暇でしかなかった。こんな形で留まるくらいなら、やりたいことの一つでもしておけば良かったという後悔はあるが、未練とは遠いような気がする。自分の趣味を楽しんでいるような余裕はなくなつて、仕事を優先して一日を終わらせることが日常と化していたが、それは納得していたことだ。

それに、そもそもこれは俺が招いた結果だ。自分で決めた死に様なのだ。警察は未だに犯人を見つけていないようだが、それも当然のことかもしれない。だって、彼らは怨恨という点に注目して、この殺人の動機であると仮定してしまったのだから。

何の面白みもない俺の願望がきっかけだった。簡単に表すなら、限界を感じたからの一言になるだろう。自分の才能と可能性に限界を覚えたことが始まりだった。いつからとか、そんなことは思い出せないが限界を覚えた瞬間に生きる意味を見出せなくなった。そうして気が付いたら死に対する憧れを持つようになった。

しかし、実行は簡単なことではない。ここまでの道りは長かった。死ぬにしても自分で手を下すなら、と苦しめない方法を探してみたがこれぞというものには巡りあえなかった。死に方を選べるなら、楽なものを探したいと思うのは誰もが理解してくれるはずだ。まあ、同意を求めたところで、目の前で座っている人たちには勝手な奴だと怒られるだろうけれど。

寝る前にインターネットを漁る習慣ができた。俺の最期を考えることが、その内来る終わりに思いを馳せることが心の安らぎにさえなっていた。そんな中で、店長から新商品の話を持ちかけられた。旬の果物を使いたいという、店長の要望にも何とか応えられそうなものまでできていたと思う。それでも俺が満足することはなかった。味も見た目も、望み通りにはいかなかった。結局、彼らに伝えることはないままだったけれど。どうせできないなら、最初から請け負わなければ良かった話である。でも、一度逃したら暫くこの機会は訪れないというパティシエとしてのプライドを捨てられなくて、断るのが惜しくなり引き受けてしまったのだ。

そうして、いつものようにインターネットを見て回っている時のことだ。依頼殺人という単語が突然現れた。見つけた瞬間に、これならいけると感じた。自分でも正確に説明できないが、これなら苦しくても問題ないという考えが頭をよぎったのだ。さらに俺以外が関われば後戻りはしようがないから、丁度良いと気付いた。サイトを開いて詳しく読んでいく内に、恐怖や生の執着でも湧いていけばこんなことは起きなかったかもしれない。でも俺には、限界から解放されることへの喜びしかなかった。ものは試しだからとその日に適当に申し込んでからあの時を迎えるまでは、心がすつきりしていたのだ。

前払いでお金を納めて、待ち合わせ場所として店内を指定した。好きな場所でもいいと言われたから、好きな場所を選んだだけで深い意味はない。鍵を開けて待つて、約束の時間に俺は殺された。首を切り裂かれた。心臓の鼓動に合わせて、真っ白な壁に血が飛び散る。徐々にぼやける視界の中でも、この二色は綺麗だった。

長年の友がいなくなっても、生活に変化はなかった。ちよつと店内が重い空気に包まれていることと会話相手が減っただけの差だ。仕事が再開して、消えた一人分の仕事分割されて回されるのが地味に面倒だが、もはや文句を言える状態ではない。いつか別のところから補充されるのを待つだけだ。それに、人間の生死なんでも人口の増減でしかない。流石にこんなことを誰かに向かって伝えたことはないけれど。まあ、俺の感性はどうでもいい。しかし、この暗い雰囲気は居心地が悪い。どうしようもないことをいつまでも悔いるのなら、憐れな

被害者になった彼の分まで生きていたいとも思つて、自分の未来を楽しめれば十分じゃないかと考えてしまうのだ。

殺した人間が言えることでもないが。